



Title	アイヌ語樺太方言におけるutaraの用法
Author(s)	阪口, 諒; Sakaguchi, Ryo
Citation	北方言語研究, 10, 187-202
Issue Date	2020-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/93116
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77598
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_187_202.pdf



アイヌ語樺太方言における utara の用法

阪口 諒

(千葉大学人文公共学府博士後期課程)

キーワード：アイヌ語、樺太方言、前方照応、総称、直示

0. はじめに

本稿では、アイヌ語樺太方言¹の utara²の用法について分析を行う。樺太方言の utara は北海道方言の utar に対応する形式であるが、その用法には異なる点が見られる。普通名詞として用いられ「仲間、親戚」を表す点、連体詞や名詞、関係節によって修飾されることで、完全な名詞句となる点は共通するが、樺太方言にはそれらとは異なった用法を持つ「単独で現れる utara」(佐藤 1987: 21)が存在する。この「単独で現れる utara」には前方照応的(anaphoric)に用いられ、「彼ら」というような意味を表す用法や、特定の先行詞を持たず総称的(generic)に不定の人々を表す用法などがあることが指摘されている(佐藤 1987)。しかしながら、その二つの用法に当てはまらない用例も存在する。

本稿の目的は、先行研究である佐藤(1987)の観点を引き継ぎ、修飾要素のない utara の機能をより包括的に説明し直すことである。そして、utara には前方照応の用法、総称的用法だけでなく、直示的用法があることを指摘する。そして、普通名詞、形式名詞と「単独で現れる utara」との意味の繋がりに関して考察する。

調査対象

主に樺太東海岸に居住していた話者の語りを記録したものを対象とした³。【資料】【Tuita】は民話資料であり、【物語】は自伝資料である。

【資料】：Piłsudski, B. (1912) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*, Cracow.

【Tuita】：Piłsudskij, B. (2002) *Fol'klor Sahalinskih Ajnov*, Yuzno-Sahalinsk.

【物語】：山邊[著]・金田一[編] (1913) 『あいぬ物語 附あいぬ語大要及語彙』博文館。

※【資料】【Tuita】の【】内の数字は物語の番号で、外の数字は行数である。

¹ 本テキストにおけるローマ字音韻表記は筆者の方式に統一した。表記は服部[編] (1964: 34) に基づき、母音音素は 5 つ/a, i, u, e, o/, 子音音素は 11 個/p, t, k, c[tc], s[s~c], r[r~l], m, n, w, y[j], h[h_a,e,o,φ_u,ç_i], '[?]/とするが、声門閉鎖音' / は表記を省略した。音節頭には全ての子音が立つが、本稿で扱う方言で音節末に立つ子音は/s, m, n, w, y, h/の 6 つである。例文のアイヌ語は、上記の音素表記に筆者が統一して書き改めている。母音の長短に関して、【資料】【Tuita】では区別されていないので、復元していない。

² uta, utah という異形態があるが、これは西海岸地域で出現する形式である。本稿での主な調査対象は東海岸地域の民話資料であり、ほぼ全てが utara という語形で出現するため、引用を除いて、本稿では utara という語形で代表させる。

³ 西海岸北部方言の Ohnuki-Tierney (1969) も調査を行ったが、修飾要素のない utara の用例は見当たらなかった。ただし、村崎 (1976) にも修飾要素のない utara は出現するので、方言差ではないようである。

1. 問題の所在

1.1. 修飾要素を伴わない utara

アイヌ語北海道方言には *utar* という形式がある。これには「親戚、仲間」を意味する普通名詞としての用法のほか、前に連体詞、名詞、関係節を伴い、「～達」、「～する人々」などの意味をもった名詞句を作る形式名詞（拘束形態素）としての用法もある。樺太方言には、それに対応する形式の *utara* があり⁴、普通名詞、形式名詞としての用法を共通に持っているが、北海道方言の *utar* と異なり⁵、「単独で現れる」場合のあることが知られている（佐藤 1987）。普通名詞としての *utar*（北海道）/*utara*（樺太）も単独で現れるが、所属関係を明示する形態である所属形 *utari(hi)*（両方言とも）として実現することがほとんどである。語形が異なっていることと、先行研究である佐藤（1987）でこれらは対象となっていないため、本稿では扱わない。両方言に共通する形式名詞 *utar~utara* の用法は次の通りである。

北海道方言（千歳方言）

- 連体詞+*utar* *nerok utar* 「それらの・人々」（佐藤 2008: 219）
名詞 +*utar* *aynu utar* 「人間・たち」（佐藤 2008: 181）
関係節+*utar* *toon ta oka utar* 「あそこ・に・いる・人々」（佐藤 2008: 181）

樺太方言

- 連体詞+*utara* *nea utara* 「その・人々」（【物語】12）
名詞 +*utara* *aynu utara* 「人間・たち」（【物語】4）
関係節+*utara* *kotan ohta okay utara* 「村・に・いる・人々」（【物語】59）

以下では混乱を防ぐため、修飾要素を伴わない *utara* を *utara*、修飾要素が前節する *utara* を *-utara* と表記する。修飾要素を伴わない *utara* は次のような例である。例文 1 では *utara* が特定の先行詞（*antecedent*）を取らず、総称的（*generic*）に用いられている。

- (1) *Keraykusu asin tan mosiri kes ta koramusine okay utara ki manu.*
そのおかげで いま この 世界 末 で 安心した 暮らし *UTARA* する 伝聞
「そのおかげで今は世の末で安心した暮らしをみんなはしているとき。」（【資料 10】102-103）

1.2. 先行研究の検討

修飾要素を持たない *utara* について記述した先行研究として佐藤（1987）が存在する。これは「単独で現れる *utara*」（佐藤 1987: 21）の用法について記述した唯一のものであるが、

⁴ 北海道方言の音節末の/r/は樺太方言において/h/もしくはrV/（V は母音）となるので、樺太方言の *utara*（-*uta(h)*）は北海道方言の *utar* と音韻が対応している。なお、樺太方言と北海道方言の音韻対応に関しては服部（1967）が詳しい。

⁵ ただし、田村（1972: 138）では北海道沙流方言においても単独で用いられる *utar* が報告されている（*utar anak eaykap pe* 「あなた方はできないの」という例）。ただし、用例が非常に少なく、この *utar* がどの程度一般的なものなのかは確認できない。

utara には総称的用法 (generic) (例文 1) と前方照応的用法 (anaphoric) (例文 2) の二つがあることを指摘している。総称的用法は特定の先行詞を持たず不定の人々を指す。それに対し、前方照応的用法は特定の先行詞 (例文 2 では□で囲んだ ay-yup-utari-hi) を持つ。

(2) ay(<an)-yup-utari-hi sap haworoke-sin an manu.

1SG.P-兄-PL-POSS 下りる 声-PL ある 伝聞

Apa tuika ta utara ahuh manu.

戸口 上 に UTARA 入る 伝聞

「兄たちが下りてくる声をした。戸口に彼らは入ったとき。」(【資料 21】 87-88)

さらに佐藤 (1987) は、(A) utara は主語として用いられた例のみ、(B) utara は生物を表した例のみ (無生物を指示しない)、(C) utara に呼応する人称接辞は動詞に現れない、ということを明らかにしている。

佐藤 (1987) のこの (A)(B)(C) の 3 点について検討する。まず (A) に関していえば、目的語として用いられた例が数例確認できる⁶。(B) に関しては、民話において擬人化された動物を含むが、やはり全て有生物を示している。(C) において「呼応する動詞の人称接辞」と言っているものは、複数標識(a)hci のことである。この複数標識(a)hci は選択的 (optional) に用いられるものであり、また特定の人称に呼応するものではない。そのため、義務的に表示される人称接辞と同列に扱うことはできない。議論の焦点を utara の用法に絞るため、複数標識の(a)hci との関わりは本稿では扱わないことにする。

また佐藤 (1987) は、utara が三人称複数の人称代名詞や人称接辞である可能性を示唆している。他方言との比較から、樺太方言の三人称複数人称代名詞は okay であることが推測される⁷。実際、知里 (1973[1942]) においては okay と報告されているが、本稿の対象資料では okay の存在を確認できていない。そのため、utara が人称代名詞である可能性も検討する必要がある。しかし、三人称の単数人称代名詞である anihhi は【資料】において 4 例しかないのに対し、【資料】だけで 109 例出現する utara は、人称代名詞と同列に扱えるものだと考えにくいように思われる。

用法に関して、総称的用法と前方照応的用法の二つがあることが指摘されていることはすでに述べたが、実際の用例を見ていくと、必ずしもこの二つの用法に当てはまらないものが出現する。民話中のセリフ⁸において直示的 (deictic) に用いられた utara が見られる。本稿ではそれを直示的用法として 2.3 で扱う。

以上を踏まえ、本稿では佐藤 (1987) の観点を引き継ぎ、調査・分析を行う。まず utara の統語的な側面を確認する。その後、utara の意味を詳しく取り上げる。その際、人称接辞として扱うべきではない複数標識 (a)hci との関係は除外した。

⁶ 【資料 21】 185 や村崎 (1976: 41) で目的語の位置で用いられた例が確認できる。【資料 21】 185 の例は受身文であり、utara が被動者となっている (動詞は utara には一致していないので、utara を主語と考えることはできない)。

⁷ 北海道東部の十勝、中部の石狩においても三人称複数人称代名詞は okay である (田村 1988: 22)。

⁸ 物語の登場人物の会話、心の中で考えたことを直接引用文の形で述べたもの。セリフでない部分を地の文 (叙述者 (物語を語る視点の持ち主) の視点から語られている部分) と呼ぶ。

1.3. utara は自由形態素か？

佐藤 (1987) は、utara には名詞的形式、動詞的形式に後続するもの (形式名詞、本稿で言う -utara) と、単独で現れるものの二つがあると指摘しているが、修飾要素が見られないものであっても、自由形態素であるか判断に迷う用例が出現する。否定副詞 ham(~han), hane (例 3~8 の下線部) が用いられている場合、utara は否定副詞と動詞の間に出現する。【資料】の 3 例を次に掲載する (例文 3~5)。

- (3) hoskikanne orowa urayki neanpe ham utara ki kun -pe ne.
先 から 戦争 TOP NEG UTARA する べき -NOM COP
「また、先に戦争を、(人々は) してはいけないものである。」(【資料 4】 58-59)

- (4) an-matak-ihī nah ye yahka, ham utara nu-hci.
1SG.P-妹-POSS そう 言う ても NEG UTARA 聞く-PL
「私の妹がそう言ったが、彼ら (私の兄たち) は聞かなかった。」(【資料 12】 58-59)

- (5) nahteh orowa enciw onne ikoiranu ham utara ki kusu.
そうして それから 人 へ 恋すること NEG UTARA する 未来
「そうして、これから人間へ恋慕することを、我らはやめよう。」(【資料 24】 219)

否定文で人称代名詞が用いられた例は次の 1 例しか確認できていないが、utara とは統語的位置が異なっている。例文 7 にあるように、疑問代名詞も人称代名詞と同じ場所に現れ、utara の位置とは異なる。

- (6) kuani han ku-nu.
私 NEG 1SG.S-聞く
「私は聞かなかった。」(Dobrotvorskij 1875: 394)

- (7) Nera ham ariki kusuiki.
どんな NEG 来る 意志
「どんな人も来ないだろう。」(Dobrotvorskij 1875: 213)

例文 3~5 にあるように、否定文で用いられた utara は、3 例全てで否定副詞の後に位置し、代名詞が用いられた場合とは位置を異にしている (例文 6, 7)。utara の統語的位置は、人称接辞 (例 8) と同じ位置であり、人称代名詞 (例 6) の位置とは異なっている。このことから、独立して用いられる人称代名詞と同列のものではなく、動詞に従属する接語 clitic⁹ 的な性質を持ったものではないかと考えられる。

⁹ 一人称人称接辞の AN(an-/an) も自立性が高く接語と考えられる。例えば、paye 「行く」に AN を付加すれば、paye-an だが、助動詞の rusuy を付加すると、paye rusuy-an (【物語】 144 など。paye-an rusuy は【物語】では確認できない) となるように、助動詞の後に置くことができる現象が見られる。

- (8) eani e-ye anpe neanpe neyra ne anahkayki hane an-nuu kusuiki.
 お前 2SG.S-言う こと TOP どんな COP でも NEG 1PL.S-聞く 意志
 「お前の言うことは、どんなことであっても私たちは聞かないつもりだ。」(【物語】37)

また、utara が動詞の直前に現れていることにより、動詞の前に現れる目的語（例文 3 では urayki, 例文 5 では ikoiranu）が utara の前に位置している¹⁰。特に例文 3 では目的語に主題を表す neanpe 「は」が用いられており（例文 9 においても）、主語は主題になっていない。目的語が utara の前に現れることは、平叙文においても同じである（例文 9, 10）。構文上省略可能な場合に三人称代名詞が現れることは何らかの強調を表していると考えてよいが、utara 自体が主題となっていないことを考えれば、utara が人称代名詞と同列のものではなく、人称接辞 an-¹¹などと同様に動詞に従属するものだと考える方がよいと思われる。

- (9) Inanupirika neanpe, hoski utara sam rusuy ike, etunne
 イナヌピリカ TOP 以前 UTARA 娶る したい が 断る
 「イナヌピリカは、以前彼らが妻にしたがったが、(イナヌピリカは) 断った。」(【資料 2】64-67)

- (10) Neteh orowano nuso paysere patch utara nukara manu.
 そうして それから 犬ゾリ 後部 だけ UTARA 見る 伝聞
 「そうして、ソリの後半分だけを人々は見たとき。」(【資料 10】37)

ただし、次の例文 11 は、例文 9, 10 とは直接目的語の位置が異なっている。

- (11) aynu isinneno ahun, utara kam eimeh.
 人 一緒に 入る UTARA 肉 配る
 「(招かれた) 人は一緒に家に入った。(彼女は) 彼らに肉を配った。」(【Tuita6】45)

例文 11 では utara が主語である可能性も考えられるが、文脈からも、また採録者であるピウスツキの訳が「она мясо раздала (彼女は肉を配った [筆者和訳])」とあることから、utara が間接目的語であることが分かる。この文では直接目的語 kam 「肉」が utara と動詞 eime[h] の間に位置しており、utara が常に動詞の直前に置かれるというわけではないことが分かる。さらに次の例文 12, 13 では、獵から帰ってきたサマイェクル (人文神の名前) から妹が肉を受け取り、その後でサマイェクルと妹が火を炊くという定型化された場面であるが、同じことが O utara V と utara OV の二様に表現されている。

¹⁰ 【資料】では目的語が明示されている他動詞文 28 例中 17 例が O utara V という語順になっているが、utara O V であっても O に相当するものが、動詞に抱合されていると判断できるものもある。

¹¹ 実際にはこれも接語と考えた方がよいと思われる。註 9 参照。

(12) utara sinka unci na utara uare.
UTARA 疲れる 火 も UTARA 焚く
「彼らは疲れ、火も彼らは焚いた。」(【資料 17】 16)

(13) utara sinka, utara poro unci uare.
UTARA 疲れる UTARA 大きな 火 焚く
「彼らは疲れ、彼らは大きな火を焚いた。」(【資料 17】 42-43)

以上のことから *utara* は動詞の直前に置かれる傾向があるが、義務的とまでは言うことができないことが分かる。また、*utara* の用例のほとんどが民話のものであるため、語りの中でどこに焦点が置かれているかによっても *utara* の置かれる位置が変わる可能性がある。

2. *utara* の用法の記述

佐藤(1987)では先行詞 (*antecedent*) の有無により、前方照応的用法と総称的用法とに分類しているが、それだけでは解釈できない例がいくつか存在する。先行詞を持つ前方照応的用法の *utara* は特定の「人間の集合」であり、かつ聞き手はその対象がどれかを指示することができる。したがって、「定」という特徴を持っている。それに対して、先行詞を持たない *utara* は「不定」の人々を表す総称的用法だとされている。しかし、セリフの中に現れる先行詞を持たない *utara* の中には、仲間に向かって用いる「我々」というものや、談話の場にいる人を指して「お前たち」というように用いられているものがある。これらは一・二人称と同じく直示的 (*deictic*) な用法であり、「定」だと考えられる。このように、セリフに用いられ、先行詞がない *utara* を直示的用法として提案する。

2.1. 前方照応的用法 (三人称複数)

これはすでに例文 2, 4, 9 で紹介したものである。これは複数の人間を指す先行詞を持つ照応表現で、「三人称複数」と扱うことができる (1.1 参照)。

2.2. 総称的用法

総称的用法は話し手を含む人一般をさすとされるが、話し手が所属する集団のみを指すと考えられる用例も見られる。

(14) Newaanpehe kusu Noteto ohta utara inawpe kara-hci.
そのこと ため ノテト(地名) で UTARA 木幣 作る-PL
「そのため、ノテトで人々はイナウ (木幣) を捧げる。」(【資料 5】 23)

次の例 15 は、ウイルタとアイヌの間の戦いに関する民話に出てくる用例だが、*utara* が *orakata* 「ウイルタ」と対比されて用いられているというよりは、ウイルタとアイヌを含んだ人間一般として *utara* が用いられていると言えるだろう。これは *urayke* が相互動詞であり、その主体が二つの集団だと考えられるからである。

- (15) Orakata orowano hoskikanne urayki rusuy kusuneyke,
 ウイルタ から 先に 戦争 したい なら
 tani asi kiroran turano **utara** urayki kun-pe ne.
 その時こそ 喜び と共に UTARA 戦争する べき-NOM COP
 「ウイルタ（民族）の方から先に戦争したがったら、そこで始めて人々は喜んで戦いをするものだ。」（【資料 4】 57-58）

日常会話資料や自伝資料においては、この用法以外の **utara** が確認できず、前方照応的な用法は民話に限定される用法の可能性が高い。次の例文 16~18 の **utara** の用法は、総称的に用いられているが、**utara** は普通名詞の **utara** の語義「親戚、仲間」と非常に近い。

- (16) Chikobiroo neanpe usaanpe **utara** kohsaake ta
 知古美郎 TOP 色々なこと UTARA の代わりに
 ene pirika neyno kii wa konte anpe nee.
 このように 良い ように する して くれる こと COP
 「知古美郎は色々なことを人々（みんな）の代わりに良いようにしてくれるのである。」
 （【物語】 41）

以下の例は西海岸南部の真岡出身者による日常会話資料である。

- (17) sake naa **uta** i-kuure.
 酒 も UTARA 1SG.P-飲ませる
 「酒も人々（みんな）は私に飲ませた。」（真岡方言、村崎 1976: 77）

- (18) anpene neeraan hecire anahka
 本当に どんな 踊り でも
 anpene anoka patch an-tek-ih **utah** ninpa.
 本当に PRON ばかり 1SG.P-手-POSS UTARA つかむ
 「本当にどんな踊りでも、本当に私ばかり私の手を人々（みんな）がつかむ。」（真岡方言、村崎 1976: 82）

2.3. 直示的用法

セリフ部分に用いられる、先行詞を持たない **utara** が存在する。これは既に導入された第三者のことについて言及する前方照応的用法とは異なっている。指示対象が不定の場合は常に「人々、みんな」（総称的用法）という意味でよいが、定の場合は、地の文であるか、セリフであるかによって、意味が変わってくる。定の **utara** は地の文においても、セリフにおいても用いられるが、セリフにおいて用いられる **utara** の中には直示（*deixis*）として用いられているものがある。その場合、**utara** は談話の場に存在する複数の人物を指示している。話し手を基準として「我々」（聞き手を含む話し手）「あなたたち」（話し手からみた聞き手）

という意味で用いられるようである。

これと似た用法は三人称単数代名詞とされる *anihi*¹² においても見ることができる。セリフにおいては、三人称単数代名詞とされる *anihi* も *utara* と同じようなふるまいをする。次の例文 19 では、談話の場にいる聞き手が *anihi* で指示されている。*anihi* が直示的に用いられた例はこの 1 例しか確認できていないが、*utara* と平行する現象が見られることは興味深い¹³。なお、この例は妻から夫に用いられたものであり、例文 8 に見られる二人称代名詞 *eani* と違って敬意が含まれていると考えられる。

(19) 妻から夫へのセリフ

“tani anahne **anihi** isam teh ohacirike ta ...”
いま TOP ANIHI いない て 留守 に
「『いまやあなたがいなくて、その留守中に…』」(【資料 21】190-92)

以下では、*utara* を、話し手を基準として、「一人称複数」(話し手を含む場合)と「二人称複数」(話し手を含まない場合)の場合に分けてみていく。

2.3.1. 一人称複数

以下のセリフでは *utara* が発言者、聞き手の両方を含んでいる。話し手、聞き手が談話の場を共有している。ただし、これは同族という意味を表している可能性もある。これも総称的用法と同じく普通名詞 *utara* の語義「親戚、仲間」と近いと言える。

(20) キツネたちが仲間内で話し合っているセリフ

nahteh orowa enciw onne ikoiranu ham **utara** ki kusu.(=例文 5)
そうして それから 人 へ 恋すること NEG UTARA する 意志
「そうして、これから人間へ恋慕することを、我々はやめよう。」(【資料 24】219)

(21) 三人称で語られる物語の中で、村人のセリフ

hannahkusu **utara** ehawkomo kun -pe han ne.
決して UTARA 声を潜める べき -NOM NEG COP
「決して我々は声を潜めるべきではないのだ。」(【資料 10】39-40)

(22) 叙述者¹⁴の兄であるキツネたちのセリフ

“nera -utara ki anahka ene kayki
どんな -人たち する ても このように も

¹² 【物語】46, 50 頁、【資料】Nr.5 014-15, 31 ; Nr.12 076-77 に *ani(hi)* が三人称単数として用いられた例が確認できる。

¹³ なお、*anihi* が「～自身」を表す(村崎 1979: 78) ことは、日本語関西方言で「自分」が二人称として用いることができるのと類似している。

¹⁴ アイヌ口承文芸の大部分は、特定の登場人物の視点から語られる。この視点の持ち主が叙述者である。

utara niwkes kun-pe ne nanko.
 UTARA できない べき-NOM COP だろう
 nahteh orowa enciw onne ikoiranu ham utara ki kusu”
 そうして それから 人間 に 恋する NEG UTARA する 未来
 nah eukoytak-ahci,
 QUOT 話し合う-PL

『どんな者たちがしてもこのように我々にはできないものだろう。そうして、人間へ恋慕することを、我々はやめよう』と（兄ギツネたちは）話し合った。』（【資料 24】 92-96）

なお、例文 3, 14 に関しても、2.2 で述べたように、不定の人々というよりは、同族、さらには一人称複数と解して良いかもしれない。例文 20~22 にあるように、セリフ（談話）では、聞き手を含む包括的な一人称複数を表しているようである。そして、聞き手を含まない場合（話者が複数の場合¹⁵）は、次の例のように anokay(ahcin)などが用いられる可能性がある。

(23) “... ikoro neanpe, tomi neanpe an-i yahka,
 宝物 TOP 富 TOP ある-NOM ても
 nata koro kun-pe han ne
 誰 持つ べき-NOM NEG COP
 yaykota e-koro kun-pe ne. yaykota e-wente yahka, anokayahcin
 自分で 2SG.S-持つ べき-NOM COP 自分で 2SG.S-壊す ても PRON
 hene an-oskoro anpe kayki han ne” nah ye-si manuy.
 NEG 1PL.S-惜しむ こと も NEG COP QUOT 言う-PL 伝聞

『…宝物は、宝器はあっても、誰が持つべきものでもない。お前が自分で持つべきものだ。自分で壊しても、私たちなどの惜しがることもない』と（兄たちは）言ったとき』（【資料 23】 201）

2.3.2. 二人称複数

以下の utara は談話の場を共有する複数の聞き手を指している（話し手を含まない）。

(24) 叙述者（とその兄たち）のもとへ来た者のセリフ
 Rurupa un nispa -utara, utara kamuy koro,
 ルルパ に住む 長者 -たち UTARA （憑）神 もつ
 nah ne kusu, an-ukopakarire.
 そう COP ので 1PL.S-相談する

『ルルパの長者たちよ、あなたたちは（憑）神をもっているというから、私たちは相

¹⁵ 話し手に関して、一人称複数は厳密には複数の話者ではなく、話者と一人以上の他者である。

談に来た』(と言った)。(【資料 27】 8-10)

例文 24 の *utara* は文脈上、前方照応的用法ではなく直示的用法と考えられる。以下の例文 25 はお爺さんから叙述者の男へのセリフだが、話し相手である男(兄嫁を奪ったクマを懲らしめに来た)と、自分の息子(兄嫁を奪ったクマ)のことを指して *utara* と言っている。

(25) お爺さんから叙述者の男へのセリフ

neya caca tani asi
その お爺さん いま 強調

“*utara urayki rusuy kusuneyke, urayki yahka, pirika*”.

UTARA 殺しあう したい なら 殺し合う ても 良い

「そのお爺さんは『あなたが果し合いをしたいなら、果し合いをしても良い』(と言った)。(【資料 12】 155-156)

(26) 叙述者のキツネから兄ギツネたちへのセリフ

“hemata kusu *utara* ene ye kusu neani” nah ay(<an)-ye
何の ため UTARA そう 言う ている のか QUOT 1SG.S-言う

nahtek an teh *utara* ukoytak-ih i ene an -i:

そう ある て UTARA 話し合う-NOM こう ある -NOM

『どうして、あなたたち(兄さんたち)はそうに言っているのか』と私は言った。
そうして、彼らはこう話し合った。(【資料 21】 127-129)

二人称複数と解釈せざるを得ない *utara* はセリフ部分にしか見られない。やはり談話の場面において場を共有し、話し手の領域内にある人間集団を指示している。*utara* は本来の語義からすれば、直接聞き手だけを指示する表現とは考えにくい。北海道沙流方言において、人称代名詞に準ずる形式としての *utar* が、女性から複数の男性、もしくは男性集団(女性を含んでいても良い)に向けて用いられる(田村 1972: 138) ことのように、敬称として用いられていると考えられる¹⁶。相手を二人称の代名詞などのように直接に表現する形式を用いないことで一種の敬意を表している可能性がある。例文 19 では、妻から夫に対して三人称単数代名詞とされる *anihi* が用いられており、敬意を表していると考えられる。これは相手を直接に表現しないことで敬意を表しているのといえるのではないだろうか。そして、三人称複数(前方照応用法)と解される *utara* が二人称複数の敬称として用いられるのは、それと平行した事例であると言える。それは次の例文 27 から裏付けられるように思われる。

¹⁶ アイヌ語北海道沙流方言において二人称敬称は AN 系 *aoka, a-/an/i-* (人称代名詞、他動詞主格/自動詞主格/他動詞目的格人称接辞) で表示される。聞き手が単数の場合には AN 系で問題ないが、聞き手が複数の場合、AN 系では包括的一人称複数の意味と区別できない。そのため二人称複数敬称には複数の人間を表す別の語彙である *utar* を用いるのだと考えられる。樺太方言の場合、AN 系人称は一人称単数にも複数にも用いられ、二人称敬称として用いられた例は確認できない。そのため、二人称敬称は別の方法で表していると考えるのが妥当である。実際、二人称単数の敬称としては例文 19 のように *anihi* が用いられるようである。

例文 27 は、ある島にたどり着いた男たちを、島の主である女性が送り返そうとする場面のものである。そこでは二人称複数が **utara** ではなく **ec(i)okay** で表されている。これは聞き手に対して敬意を表していない可能性がある。ただし、民話における **ec(i)okay** の例はこの一例のみなので、詳細は不明である。

(27) 三人称の話し手のセリフ

ecokay neanpe cis ohta eci-okay.

PRON TOP 舟 に 2PL.S-いる

『お前らは舟にいなさい』(と彼女は言った)。 (【資料 6】 61-62)

なお、セリフ部分において、**utara** の全てが直示的に用いられるわけではない。以下の例 28 のように、話し手の領域の外にある第三者のことを指して用いられた例もある。これは先行詞をもつ前方照応的用法の **utara** である。

(28) 叙述者のキツネからルルパの長者の妻へのセリフ

“ne kusu tani **utara** ahuh kusuneyke,

COP ので もう UTARA 入る なら

ene anpe hoskino e-sanke kuni ene an -i ...”

そのように あるもの 先に 2SG.S-出す NOM こう ある -NOM

「だから彼ら(キツネたち)が入ってきたら、それを先にあなたがこう出すのです…」

(【資料 21】 30)

2.3.3. まとめ

セリフにおける **utara** の指示対象は話し手の領域内にいる人物である場合が多い。セリフ内の **utara** は、話し手を基準として話し手を含む場合は一人称複数、含まない場合は二人称複数の意味で用いられる。そして、**utara** の二人称複数の用法は敬意を表すためのものである可能性がある。これは、三人称単数代名詞とされる **anihi** が二人称単数への敬称として用いられていることを考えればなおさらである。

3. **utara** の意味の包括的な記述

前節において、佐藤(1987)が指摘した前方照応的用法、総称的用法の二つのほかに、直示的用法を確認した。ここで、なぜ同じ形式が様々な異なる機能で用いられるのかという問題が生じる。同じ **utara** という形式が、文脈によって、「不定の人々(総称的)」「三人称複数(前方照応的)」、「一人称複数(直示的)」「二人称複数(直示的)」という異なる意味を表している。以下で **utara** の人称代名詞との共通点と、/utara/という形式の意味のつながりに関して考察する。

3.1. 三人称代名詞と **utara** の共通点

統語的な観点から、**utara** が人称代名詞というよりは人稱接辞と統語的位置が共通する場

合があることを 1.2 で述べたが、第 2 節で述べた用法は、人称代名詞の機能と似た部分がある。まず、前方照応という点で言えば、三人称の人称代名詞と共通する。そして、直示という観点から言えば、一・二人称の人称代名詞と共通点を持つ。また三人称単数代名詞とされる **anihi** にも直示的に用いられた例が確認できることは 2.3 で確認した。直示的に用いられた **anihi** (例文 19) は二人称敬称であると考えられるが、**utara** も同じく二人称 (複数) 敬称として用いられていると考えられる (例文 24~26 参照)。

その他、人称代名詞とされる **anihi** には **utara** との共通点がいくつか見られる。それは、一・二人称の人称代名詞は連体修飾語によって修飾されないが、三人称の代名詞は修飾される (田村 1971: 10-11; 1972: 32-33) という点と、その人を表す普通名詞の後につけて使われる (田村 1988: 29) という点である。以下は北海道石狩方言 (例文 29) と樺太西海岸北部方言 (例文 30) の例である。

- (29) taan unarpe **anihi** patek oman a wa.
 あの おばさん ANIHI だけ 行く 完了 よ
 「あのおばさんだけ行ったわ。」(石狩方言、田村 1971: 10)

誰を指しているか分かる場合、言うのを避ける場合、**taan unarpe anihi** は言わないが (田村 1971: 10)、これも、X+**utara** が **utara** となることへの示唆となる。なお、**anihi** は樺太方言においても同じ用法で用いられた例が確認できる。

- (30) tara aynu **anihi** naa oman kusu nee manu.
 あの 人 ANIHI も 行く 未来 COP 伝聞
 「あの人自身も行くそうです。」(樺太西海岸北部方言、村崎 1979: 146)

もちろん、連体修飾なしで用いられた例も確認できる。

- (31) anokay asisne conpay orowano **anihi** asisne conpay an-koro teh
 PRON 五つの 升 それから ANIHI 五つの 升 1PL.S-持つ て
 「私は五升、それから彼は五升、私たちは買って、」(【物語】 50)

- (32) neteh tani mac(<mat)-ihi tek ani sitayki,
 そうして 今 妻-POSS 手 で 叩く
 hoskikane makan, **anihi** yoponi makan.
 先に 上る ANIHI あとから 上る
 「そうしていま、(クマは) 妻を手で打つと (その妻は) 先に山手へと上った。彼はその後から山手へと上っていった。」(【資料 12】 76-77)

例文 29~32 と次の例 33 からは **anihi** と前方照応的用法の **utara** との類似が確認できる。

(33) Sine kotan orowa, paykara cise koro -utara

ある 村 から 春 家 持つ -人たち

ceh e kotan onne utara paye teh,

魚 食べる 村 に UTARA 行く て

「ある村から、春、家を持つ人々はチェペーコタン（夏小屋のある村）に行つて、」（【資料 9】 5）

anihi と utara の類似は以下のように図示できる。

tara aynu anihi 「あの・人・ANIHI」（例文 30） →anihi

cise koro -utara 「家・を持つ・人々」（例文 33） →utara

以上のことから、anihi と同様に utara（前方照応的用法）は修飾要素を持つ-utara が元で、修飾成分が省略された形式として utara が生まれたと推測できるだろう。連体詞、名詞、関係節の後に置かれる形式名詞（拘束形態素）の修飾要素が省略されたという過程を想定すれば、形式名詞-utara と前方照応的用法で用いられる utara の間の溝を埋めることができる。

3.2. utara のそれぞれの意味のつながり

utara の様々な用法は、北海道方言の utar とも共通する「親戚、仲間（普通名詞）」「～する人々（形式名詞）」という用法が基本で、他の用法はこれから派生したものと推測される。「人間一般」（総称的用法）、「一人称複数」と解釈できる utara は、普通名詞 utara の「仲間」という語義に由来すると思われる。-utara は、形式名詞として「～たち」「～する人々」という意味を加えるが、X -utara（X は修飾要素）の X が省略されたものだと考えれば、前方照応表現として「三人称複数」という用法になる。utara も動詞に隣接することが多いという特徴があるが、人称を表すという点で人称接辞と類似しており、人称接辞と同じ位置に現れる傾向があるということかもしれない。

次に、utara がなぜ直示的に用いられるのかという点は、談話という場を想定することで解決できる。直示的用法は話し手を基準にした用法だが、「一人称複数」は、聞き手と話し手の両方を含む形式である¹⁷。話し手の領域にいる「人間一般」と解釈することができ、この点が総称的用法とつながる。そして、更に「聞き手を含む」という点に重点を置けば「二人称複数」の用法になると考えられる。しかし、この「二人称複数（敬称）」という用法は、utara 本来の語義から考えると、やはり聞き手だけを直接に指示する形式だとは思われない。実際、複数の聞き手を表示するには二人称複数人称代名詞 ec(i)okay も用いられている（例文 27）。しかし、この二人称複数代名詞 ec(i)okay は、文脈から聞き手に対する敬意を表して

¹⁷ utara の用法と直接に関わるわけではないが、樺太方言では一人称複数を表すのに、北海道アイヌ語のような話し相手を含むか否かという除外(exclusive)と包括的(inclusive)という区別は見られない。北海道で除外の一人称複数として用いられる人称は一人称単数として用いられている。服部・知里(1960)からは、人称代名詞 ciokay-cookay（北海道で除外の一人称複数として用いられる cokay(y)に対応）は一人称単数としてのみ用いられていることが確認できる。

いるとは考えられない。複数の聞き手に対する敬意を表すには別の形式が必要となるが、その別の形式として複数の人間集団を表す *utara* が用いられていると考えられる¹⁸。これは単数の聞き手を指示する際には *eani* が通常用いられるが（例文 8）、敬意を表す必要がある場合には三人称単数代名詞とされる *anihi* が用いられていること（例文 19）と平行した現象と考えられる。複数の聞き手への敬称として *utara* が採用された結果、「二人称複数」として用いられる用法が生じたと考えられる。

4. 結論

まず、統語的な側面から言うと、修飾要素を伴わない *utara* は主語だけでなく、少数だが目的語の位置にも現れる。否定文においては、否定副詞と動詞の間に *utara* が出現する。平叙文においても *utara* は動詞の直前に置かれ（目的語がある場合は目的語の後に置かれることが多い）、動詞に隣接している例が多い。しかし、はっきりと *utara* と動詞の間に目的語が出現する例もあり、*utara* の自立性は比較的高いと思われる。*utara* の直後に動詞が置かれる（動詞の直前に *utara* が置かれる）という点は人称接辞と同じであり（例文 6, 8 参照）、人称を表すという意味的な繋がりからこの位置になっている可能性がある。

用法に関しても、佐藤（1987）が指摘した前方照応的用法、総称的用法の二つの外に、直示的用法が確認できた。しかし、なぜ文脈によって、同じ *utara* という形式が「不定の人々（総称的）」「三人称複数（前方照応的）」「一人称複数（直示的）」「二人称複数（直示的）」という、様々な意味を表すのかという問題が出てくる。*/utara/*は、北海道方言の *utar* とも共通する「親戚、仲間（普通名詞）」「～する人々（形式名詞）」という用法が基本で、他の用法はこれから派生したものだと思われる。総称的用法の「人間一般」「仲間」、直示的用法の「一人称複数」は普通名詞 *utara* の「仲間」という語義に由来すると思われる。それに対して、「二人称複数」という用法は、二人称複数人称代名詞 *ec(i)okay* がない敬意を表すために複数の人間集団を表す *utara* が用いられた結果、生じたものだと考えられる。

-utara は、形式名詞として「～たち」「～する人々」という意味を加えるが、*X-utara* (*X* は修飾要素) の *X* が省略されたものだと考えれば、前方照応表現として「三人称複数」という用法になる。

以上、*utara* の用法について述べてきた。この分析の大半は民話資料である【資料】に基づくものである。そのため、厳密に言えば、この分析結果は樺太東海岸の民話の文体における *utara* に限定されたものである。今後、さらに樺太内部の他の地点の資料を追加すれば、歴史的背景を含めたより詳細な説明が可能となるかもしれない。そして、今回扱わなかった複数標識(*a)hci* との関係についてもより詳細な検討が必要だろう。しかし、現時点では複数標識の用法そのものに不明点が多く残されているため、今後の課題としたい。また、*utara* の総称的用法や直示的用法は、北海道方言における AN 系¹⁹と共通するものがあるが、樺太方

¹⁸ 北海道沙流方言で二人称敬称としても用いられる AN 系人称は、樺太方言では一人称単数、複数の双方に用いられているため、AN 系人称を二人称に用いることは混乱を招くと考えられる。実際、AN 系人称が二人称敬称として使われたと考えられる例は見当たらない。

¹⁹ アイヌ語北海道沙流方言において AN 系 *aoka, a-/an/i-*（人称代名詞、他動詞主格/自動詞主格/他動詞目的格人称接辞）は①不定人称、②受身文の行為の起点、③包括的一人称複数、④二人称敬称、⑤引用文中の一人称を表す（田村 1988、ただし田村 1988 は「不定人称」という名称で記述している）。

言における AN 系人称そのものもさらに検討する必要がある。

謝辞

本稿の執筆にあたり、貴重な助言をくださった査読者の先生方に深く感謝を申し上げます。また、本稿の特に 1.1, 1.2 での議論は、岸本宜久氏から頂いた貴重なコメントも参考にしています。岸本氏の指摘のおかげで今の形にまとめることができました。また、本稿の一部は千葉大学地域研究センター定例会（2019 年 10 月、千葉大学）でも発表しています。コメントして下さいました全ての方に感謝申し上げます。当然ながら、本稿におけるすべての誤りは筆者に帰するものです。本論文の不適切な点は次号以降で訂正致します。

略号一覧

1,2,3	1,2,3 人称	SG	単数	PL	複数
COP	繫辞	O	目的格	QUOT	引用
NEG	否定	POSS	所属接辞	S	主格
NOM	名詞化	PRON	人称代名詞	TOP	主題

参考文献

- Dobrotvorskij, M. M. (1875) *Ainsko-Russkij Slovar'*. Kazan.
- Ohnuki-Tierney, Emiko (1969) *Sakhalin Ainu Folklore*, American Anthropological Association, Washington, D.C.
- Piłsudski, Bronisław (1912) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*. Cracow.
- Piłsudskij, Bronislav. (2002) *Fol'klor Sahalinskih Ajnov, Juzno-Sahalinsk*.
- 佐藤知己 (1987) 「アイヌ語樺太方言の‘Utara’について」『ウエネウサラ』創刊号: 20-26.
- 佐藤知己 (2008) 『アイヌ語文法の基礎』大学書林.
- 田村すゞ子 (1971) 「アイヌ語石狩方言の人称代名詞と人称接辞」金田一博士米寿記念論集編集委員会[編]『金田一博士米寿記念論集』1-27. 三省堂.
- 田村すゞ子 (1972) 「アイヌ語沙流方言の人称の種類」『言語研究』61: 17-39.
- 田村すゞ子 (1988) 「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一[編著]『言語学大辞典 第1巻 世界言語編 (上)』6-94. 三省堂.
- 知里真志保 (1973[1942]) 「アイヌ語法研究—樺太方言を中心として—」『知里真志保著作集 3』456-586. 平凡社.
- 服部四郎[編] (1964) 『アイヌ語方言辞典』岩波書店.
- 服部四郎 (1967) 「アイヌ語の音韻構造とアクセント—アイヌ祖語再構の一試み—」『音声の研究』13: 207-223.
- 服部四郎・知里真志保 (1960) 「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」『民族学研究』24(4): 307-342.
- 村崎恭子 (1976) 『カラフトアイヌ語』国書刊行会.
- 村崎恭子 (1979) 『カラフトアイヌ語—文法篇—』国書刊行会.
- 山邊安之助[著]・金田一京助[編] (1913) 『あいぬ物語 附あいぬ語大要及語彙』博文館 (河

The Usage of *utara* as an Autonomous Word in Sakhalin Ainu

Ryo SAKAGUCHI

(Graduate School of Humanities and Social Sciences, Chiba University)

The Hokkaido Ainu have the dependent noun (bound morpheme) *-utar*, which cannot occur on its own as it must be modified with an adnominal, noun (phrase), or relative clause. However, in the Sakhalin dialect, some *utara* which corresponds to *utar* do not take modifiers. Sato (1987) pointed out that the uses of “*utara* as an autonomous word” are of two kinds: generic use and anaphoric use. This paper re-analyzed the use of *utara* as an autonomous word. The main points mentioned in this paper are as follows:

1. The usage of *utara* is of three kinds: anaphoric, generic, and deictic uses.
2. Most instances of the use of *utara* mean third person plural (anaphoric use) and indefinite person (generic use). However, in quotations, *utara* also used as a deictic.
3. The meaning of *utara* in deictic use depends on whether the speaker is included or not. If the speaker is included, the *utara* refers to first person plural, and if the speaker is not included, the *utara* refers to second person plural.

(さかぐち・りょう adua1366@chiba-u.jp)